

雛

芥川龍之介

青空文庫

これは或老女の話である。

箱を出る顔忘れめや雛二対

蕪村

……横浜の或亜米利加人へ雛を売る約束の出来たのは十一月頃のことです。紀の国屋と申したわたしの家は親代々諸大名のお金御用を勤めて居りましたし、殊に紫竹とか申した祖父は大通の一人にもなつて居りましたから、雛もわたしのではございますが、中々見事に出来て居りました。まあ、申さば、内裏雛は女雛の冠の瓔珞にも珊瑚がはひつて居りますとか、男雛の塩瀬の石帯にも定紋と替へ紋とが互違ひに續ひになつて居りますとか、さう云ふ雛だつたのでございます。

それさへ売らうと申すのでございますから、わたしの父、十二代目の紀の国屋伊兵衛はどの位手もとが苦しかったか、大抵御推量にもなれるでございませう。何しろ徳川家の御瓦解以来、御用金を下げて下すつたのは加州様ばかりでございます。それも三千兩の御用金の中、百兩しか下げては下さいません。因州様などになりますと、四百兩ばかりの

御用金のかたに赤間^{あかま}が石^{いし}の硯^{すずり}を一つ下すただけでございました。その上火事には二三度も遇ひますし、蝙蝠^{かうもり}傘^{がさ}屋などをやりましたのも皆手違ひになりますし、当時はもう目ぼしい道具もあらかた一家の口すごしに売り払つてゐたのでございます。

其処^{そこ}へ雛でも売つたらと父へ勧めてくれましたのは丸佐と云ふ骨董^{こつとうや}屋の、……もう故人になりましたが、禿^はげ頭の主人^{あたま}でございます。この丸佐の禿^はげ頭位、可笑^{をか}しかつたものはございませぬ。と申すのは頭のまん中に丁度^{あんま}按摩^ま膏^{かう}を貼つた位、入れ墨^{すみ}がしてあるのでございます。これは何でも若い時分、ちよいと禿^はげを隠す為に彫^うらせたのださうでございますが、生^{あいに}憎^{にく}その後頭の方は遠慮なしに禿^はげてしまひましたから、この脳天の入れ墨だけ取り残されることになつたのだとか、当人自身申して居りました。……さう云ふことは兎も角も、父はまだ十五のわたしを可哀さうに思つたのでございませう、度々丸佐に勧められても、雛を手放すことだけはためらつてゐたやうでございませう。

それをとうとう売らせたのは英吉と申すわたしの兄、……やはり故人になりましたが、その頃まだ十八だつた、癩^{かん}の強い兄でございます。兄は開化人とでも申しませうか、英語^{とくほん}の読^よ本を離したことの無い政治好きの青年でございました。これが雛の話になると、雛祭などは旧弊だとか、あんな実用にならない物は取つて置いても仕方がないとか、いろいろ

ろけなすのでございます。その為に兄は昔風の母とも何度口論をしたかわかりません。しかし雛を手放しさへすれば、この大歳おほとしの凌ぎしのだけはつけられるのに違ひございませんから、母も苦しい父の手前、さうは強いことばかりも申されなかつたのでございませう。雛は前にも申しました通り、十一月の中旬にはとうとう横浜の亜米利加人アメリカへ売り渡すことになつてしまひました。何、わたしでございますか？ それは駄々もこねましたが、お転婆だつたせゐでございませう。その割にはあまり悲しいとも思はなかつたものでございます。父は雛を売りさへすれば、紫繻子むらさきしゆすの帯を一本買つてやると申して居りましたから。：

その約束の出来た翌晩、丸佐は横浜へ行つた歸りに、わたしの家へ参りました。

わたしの家と申ししましても、三度目の火事に遇つた後は普請ふしんもほんたうには参りません。焼け残つた土蔵を一家の住居すまひに、それへさしかけて仮普請を見世みせにしてゐたのでございませう。尤も当時は俄仕込みにはかじこの薬屋をやつて居りましたから、正徳丸とか安経湯あんけいたうとか或は又胎毒散とか、——さう云ふ薬の金看板きんだけは薬箆くすりだんす筒の上に並んで居りました。其処に又無尽燈むじんとうがともつてゐる、……と申したばかりでは多分おわかりになりますまい。無尽燈と申しますのは石油の代りに種油を使ふ旧式のランプでございませう。可笑をかしい話でござ

いますが、わたしは未^{いまだ}に薬種^{ちんぴ}の匂、陳皮^{だいわう}や大^{かならず}黄^{かう}の匂がすると、必^{かならず}この無^む尽^{じん}燈^{とう}を思^{おも}ひ出^ださずには居^ゐられません。現^{いま}にその晩^{ばん}も無^む尽^{じん}燈^{とう}は薬種^{ちんぴ}の匂の漂^{ただよ}つた中に、薄^{はく}暗^{あん}い光^{ひかり}を放^{はな}つて居^ゐりました。

頭^{かぶ}の禿^{かぶ}げた丸^{まる}佐^さの主人^{しゅじん}はやつと散^{さん}切^ぎりになつた父^{ちち}と、無^む尽^{じん}燈^{とう}を中^{なかつ}に坐^まりました。

「では確^{たしか}かに半^{はん}金^{きん}だけ、……どうかちよいとお検^{あらた}め下^{くだ}さい」

時^{とき}候^{こう}の挨拶^{あいさつ}をすませて後^{のち}、丸^{まる}佐^さの主人^{しゅじん}がとり出^だしたのは紙^し包^{ほう}みのお金^{かね}でございませう。その日^ひに手^てつ^てけを貰^{もら}ふことも約^{やく}束^{そく}だつたのでございませう。父^{ちち}は火^ひ鉢^{はち}へ手^てをやつたなり、何^{なん}も云^いはずに時^じ儀^ぎをしました。丁^{てい}度^どこの時^{とき}でございませう。わたしは母^{はは}の云^いひつ^つけ通^{とほ}り、お茶^{ちや}のお給^{たま}仕^しに参^{まゐ}りました。ところがお茶^{ちや}を出^ださうとすると、丸^{まる}佐^さの主人^{しゅじん}は大^{だい}声^{せい}で、「そりやあいけません。それだけはいけません。」と、突然^{とつぜん}かう申^{まう}すではございせんか？ わたしはお茶^{ちや}がいけないのかと、ちよいと呆^{あつ}氣^けにもとられました。が、丸^{まる}佐^さの主人^{しゅじん}の前^{まえ}を見ると、もう一つ紙^しに包^{ほう}んだお金^{かね}がちやんと出^でてゐるのでございませう。

「これやあほんの輕^{けい}少^{せう}だが、志^しはまあ志^しだから、……」

「いえ、もうお志^しは確^{たしか}かに頂^{いただき}きました。が、こりやあどうかお手^てもとへ、……」

「まあさ、……そんなに又^{また}恥^{はづかし}をかかせるもんぢやあない。」

「冗談仰^{おつしや}有^あつちやあいけません。檀那^{だんな}こそ恥をおかかせなさる。何も赤の他人ぢやあなし、大檀那以来お世話になつた丸佐のしたことぢやあごわせんか？ まあ、そんな水つ臭いことを仰有^あらずに、これだけはそちらへおしまひなすつて下さい。……おや、お嬢さん。今晩は、おうおう、今日は蝶々^{てふてふまけ}が太へん綺麗にお出来なすつた！」

わたしは別段何の気なしに、かう云ふ押し問答を聞きながら、土蔵の中へ歸つて来ました。

土蔵は十二畳も敷かりませうか？ 可也^{かなり}広うございましたが、筆筒もあれば長火鉢もある、長持もあれば置戸棚もある、——と云ふ体裁でございましたから、ずっと手狭な気がしました。さう云ふ家財道具の中にも、一番人目につき易いのは都合三十幾つかの総桐の箱でございます。もとより雛の箱と申すことは申し上げるまでもございますまい。これが何時^{いつ}でも引き渡せるやうに、窓したの壁に積んでございました。かう云ふ土蔵のまん中に、無尽燈は見世へとられましたから、ぼんやり行^{あんどう}燈がともつてゐる、——その昔じみた行燈の光に、母は振り出しの袋を縫ひ、兄は小さい古机に例の英語の読本が何か調べてゐるのでございます。それには変つたこともございません。が、ふと母の顔を見ると、母は針を動かしながら、伏し眼になつた睫毛^{まつげ}の裏に涙を一ぱいためて居ります。

お茶のお給仕をすませたわたしは母に褒めて貰ふことを楽しみに……と云ふのは大袈裟おおげさにしろ、待ち設ける気もちはございました。其処そこへこの涙でございませう？ わたしは悲しいと思ふよりも、取りつき端はに困つてしまひましたから、出来るだけ母を見ないやうに、兄のゐる側へ坐りました。すると急に眼を挙げたのは兄の英吉でございます。兄はちよいとげんさうに母とわたしとを見比べましたが、忽たちまち妙な笑ひ方をする、又横文字を読み始めました。わたしはまだこの時位、開化を鼻にかける兄を憎んだことはございません。お母さんを莫迦ばかにしてゐる、——一図いちずにさう思つたのでございます。わたしはいきなり力一ぱい、兄の背中をぶつてやりました。

「何をする？」

兄はわたしを睨にらみつけました。

「ぶつてやる！　ぶつてやる！」

わたしは泣き声を出しながら、もう一度兄をぶたうとしました。その時はもう何時の間にか、兄の癩癬かんぺきの強いことも忘れてしまつたのでございます。が、まだ挙げた手を下さない中に、兄はわたしの横髪よこびんへぴしやりと平手を飛ばせました。

「わからず屋！」

わたしは勿論泣き出しました。と同時に兄の上にも物差しが降つたのでございませう。兄は直すぐと威丈高ゐたけだかに母へ食つてかかりました。母もかうなれば承知しません。低い声を震ふるはせながら、さんざん兄と云ひ合ひました。

さう云ふ口論の間中、わたしは唯悔くやし泣きに泣き続けてゐたのでございます。丸佐の主人を送り出した父が無尽燈を持つた儘、見世からこちらへはひつて来る迄は。……いえ、わたしばかりではございません。兄も父の顔を見ると、急に黙つてしまひました。口数くすうを利きかない父位、わたしはもとより当時の兄にも、恐しかつたものはございませんから。：

：

その晩雛は今月の末、残りの半金を受け取ると同時に、あの横浜の亜米利加人へ渡してしまふことにきまりました。何、売り価ねでございますか？ 今になつて考へますと、莫迦ばかしいやうでございますが、確か三十円とか申して居りました。それでも当時の諸式にすると、ずるぶん高価には違ひございません。

その内に雛を手放す日はだんだん近づいて参りました。わたしは前にも申しました通り、格別それを悲しいとは思はなかつたものでございます。ところが一日一日と約束の日が迫つて来ると、何時か雛と別れるのはつらいやうに思ひ出しました。しかし如何いかに子供とは

申せ、一旦手放すときまつた雛を手放さずにすまうとは思ひません。唯人手に渡す前に、もう一度よく見て置きたい。内裏雛、五人囃し、左近の桜、右近の橘、雪洞、屏風、蒔絵の道具、——もう一度この土蔵の中にさう云ふ物を飾つて見たい、——と申すのが心願でございました。が、性来一徹な父は何度わたしにせがまれても、これだけのことを許しません。「一度手附けをとつたとなりやあ、何処にあらうが人様のものだ。人様のものはいぢるもんぢやあない。」——かう申すのでございます。

するともう月末に近い、大風の吹いた日でございます。母は風邪に罹つたせゐるか、それとも又下唇に出来た粟粒程の腫物のせゐるか、氣持が悪いと申したぎり、朝の御飯も頂きません。わたしと台所を片づけた後は片手に額を抑へながら、唯ちつと長火鉢の前に俯向いてゐるのでございます。ところが彼はお午時分、ふと顔を擡げたのを見ると、腫物のあつた下唇だけ、丁度赤いお薩のやうに脹れ上つてゐるではございませんか？ しかも熱の高いことは妙に輝いた眼の色だけでも、直とわかるのでございます。これを見たわたしの驚きは申す迄もございません。わたしは殆ど無我夢中に、父のある見世へ飛んで行きました。

「お父さん！ お父さん！ お母さんが大変ですよ。」

父は、……それから其処にゐた兄も父と一しよに奥へ来ました。が、恐しい母の顔には呆氣にとられたのでございませう。ふだんは物に騒がぬ父さへ、この時だけは茫然としたなり、口も少時^{しばらく}は利かずに居りました。しかし母はさう云ふ中にも、一生懸命に微笑しながら、こんなことを申すのでございます。

「何、大したことはありませんまい。唯ちよいとこのお出来に爪をかけたただけなのですから、……今御飯の支度をします。」

「無理をしちやあいけない。御飯の支度なんぞはお鶴にも出来る。」

父は半ば叱るやうに、母の言葉を遮^{さへぎ}りました。

「英吉！ 本間さんと呼んで来い！」

兄はもうさう云はれた時には、一散に大風の見世の外へ飛び出して居つたのでございませす。

本間さんと申す漢方医、——兄は始終藪医者などと莫迦^{ばか}にした人でございしますが、その医者も母を見た時には、当惑さうに、腕組みをしました。聞けば母の腫物は面^{めん}疔^{ちやう}だと申すのでございますから。……もとより面疔も手術さへ出来れば、恐しい病氣ではございませまい。が、当時の悲しさには手術どころの騒ぎではございせん。唯煎^{せん}薬^{やく}を飲ませ

たり、蛭ひるに血を吸はせたり、——そんなことをするだけでございます。父は毎日枕もとに、本間さんの薬を煎じました。兄も毎日十五錢づつ、蛭を買ひに出かけました。わたしも、……わたしは兄に知れないやうに、つい近所のお稲荷様へお百度を踏みに通ひました。——さう云ふ始末でございますから、雛のことも申しては居られません。いえ、一時わたしを始め、誰もあの壁かべ側はに積んだ三十ばかりの総桐の箱には眼もやらなかつたのでござい
ます。

ところが十一月の二十九日、——愈いよいよ雛と別れると申す一日前のことでございます。わたしは雛と一しよにゐるのも、今日が最後だと考へると、殆ど矢も楯たてもたまらない位、もう一度箱が明けたくなりました。が、どんなにせがんだにしろ、父は不承知に違ひありません。すると母に話して貰ふ、——わたしは直すくにさう思ひましたが、何しろその後母の病気は前よりも一層重おもつて居ります。食べ物もおも湯すすを啜すする外は一切喉のどを通りません。殊にこの頃は口中へも、絶えず血の色を交へた膿うみがたまるやうになつたのでございます。かう云ふ母の姿を見ると、如何いかに十五の小娘にもせよ、わざわざ雛を飾りたいなぞとは口へ出す勇氣も起りません。わたしは朝から枕もとに、母の機嫌を伺ひ伺ひ、とうとうお八つになる頃迄は何も云ひ出さずにしまひました。

しかしわたしの眼の前には金網を張った窓の下に、例の総桐の雛の箱が積み上げてある
 のでございます。さうしてその雛の箱は今夜一晚過ぎましたが最後、遠い、横浜の異人屋敷
 へ、……ことによれば亜米利加^{アメリカ}へも行つてしまふのでございます。そんなことを考へると、
 愈我慢^{いよいよ}は出来すまい。わたしは母の眠つたのを幸ひ、そつと見世へ出かけました。見世
 は日当りこそ悪いものの、土蔵の中に比べれば、往来の人通りが見えるだけでも、まだし
 も陽気でございます。其処に父は帳合^{しらべ}ひを検べ、兄はせつせつと片隅の薬研^{やげん}に甘草^{かんざう}か何
 かを下^{おろ}して居りました。

「ねえ、お父さん。後生^{ごしやう}一生の願ひだから、……」

わたしは父の顔を覗^{のぞ}きこみながら、何時^{いつ}もの頼みを持ちかけました。が、父は承知する
 どころか、相手になる景色^{けしき}もございません。

「そんなことはこの間も云つたちやあないか？……おい、英吉！ お前は今日は明るい内
 に、ちよいと丸佐へ行つて来てくれ。」

「丸佐へ？……来てくれと云ふんですか？」

「何、ランプを一つ持つて来て貰ふんだが、……お前、歸りに貰つて来ても好^いい。」

「だつて丸佐にランプはないでせう？」

父はわたしをそつちのけに、珍しい笑ひ顔を見せました。

「燭台か何かぢやあるまいし、……ランプは買つてくれつて頼んであるんだ。わたしが買ふよりやあ確だから。」

「ぢやあもう無尽燈はお廃止ですか？」

「あれももうお暇の出し時だらう。」

「古いものはどしどし止めることです。第一お母さんもランプになりやあ、ちつとは氣も晴れるでせうから。」

父はそれぎり元のやうに、又算盤そろばんを弾はじき出しました。が、わたしの念願は相手にされなければされないだけ、強くなるばかりでございます。わたしはもう一度後ろから父の肩を揺すぶりました。

「よう、お父さんつてば。よう。」

「うるさい！」

父は後ろを振り向きもせず、いきなりわたしを叱りつけました。のみならず兄も意地悪さうに、わたしの顔を睨にらめて居ります。わたしはすっかり悄しよげ氣返つた儘、そつと又奥へ歸つて来ました。すると母は何時いつの間にか、熱のある眼を挙げながら、顔の上にかざし

た手の平を眺めてゐるのでございます。それがわたしの姿を見ると、思ひの外はつきりかう申しました。

「お前、何をお父さんに叱られたのだえ？」

わたしは返事に困りましたから、枕もとの羽根楊枝をいぢつて居りました。

「又何か無理を云つたのだらう？……」

母はぢつとわたしを見たなり、今度は苦しさに言葉を継ぎました。

「わたしはこの通りの体だしね、何も彼もお父さんがなさるのだから、おとなしくしなけりやあいけませんよ。そりやお隣の娘さんは芝居へも始終お出でなさるさ。……」

「芝居なんぞ見たくはないんだけれど……」

「いえ、芝居に限らずさ、簪だとか半襟だとか、お前にやあ欲しいものだらけでもね、

……」

わたしはそれを聞いてゐる中に、悔やしいのだから悲しいのだから、とうとう涙をこぼしてしまひました。

「あのねえ、お母さん。……わたしはねえ、……何も欲しいものはないんだけれどねえ、唯あのお雛様を売る前にねえ、……」

「お雛様かえ？ お雛様を売る前に？」

母は一層大きい眼にわたしの顔を見つめました。

「お雛様を売る前にねえ、……」

わたしはちよいと云ひ洩りました。その途端にふと気がついて見ると、何時の間にか後ろに立つてゐるのは兄の英吉でございます。兄はわたしを見下しながら、
不相変あひかはらず慳けん貪どんにかう申しました。

「わからず屋！ 又お雛様のことだらう？ お父さんに叱られたのを忘れたのか？」

「まあ、好いぢやあないか？ そんなにがみがみ云はないでも。」

母はうるささうに眼を閉ぢました。が、兄はそれも聞えぬやうに叱り続けるのでございます。

「十五にもなつてゐる癖に、ちつとは理窟もわかりさうなもんだ？ 高があんなお雛様位！ 惜しがりなんぞするやつがあるもんか？」

「お世話焼きぢや！ 兄さんのお雛様ぢやあないぢやあないか？」

わたしも負けずに云ひ返しました。その先は何時も同じでございます。二言三言云ひ合ふ中に、兄はわたしの襟えりがみ上つかを掴むと、いきなり其処へ引き倒しました。

「お転婆！」

兄は母さへ止めなければ、この時もきつと二つ三つは折檻^{せつかん}して居つたでございませう。が、母は枕の上に半ば頭を擡^{もた}げながら、喘^{あへ}ぎ喘^{あへ}ぎ兄を叱りました。

「お鶴が何をしやあしまいし、そんな目に遇はせるにやあ当らないぢやあないか。」
「だつてこいつはいくら云つても、あんまり聞き分けがないんですもの。」

「いいえ、お鶴ばかり憎いのぢやあないだらう？ お前は……お前は、……」

母は涙をためた儘、悔やしさうに何度も口ごもりました。

「お前はわたしが憎いのだらう？ さもなけりやあわたしが病氣だと云ふのに、お雛様を……お雛様を売りがつたり、罪もないお鶴をいぢめたり、……そんなことをする筈はないぢやあないか？ さうだらう？ それならなぜ憎いのだか、……」

「お母さん！」

兄は突然かう叫ぶと、母の枕もとに突立つたなり、肘^{ひぢ}に顔を隠しました。その後父母の死んだ時にも、涙一つ落さなかつた兄、——永年政治に奔走してから、癲^{てん}狂^{きやう}院^{いん}へ送られる迄、一度も弱みを見せなかつた兄、——さう云ふ兄がこの時だけは噉^すり泣きを始めたのでございます。これは興奮し切つた母にも、意外だつたのでございませう。母は長い溜

息をしたぎり、申しかけた言葉も申さずに、もう一度枕をしてしまひました。……

かう云ふ騒きがあつてから、一時間程後でございませう。久しぶりに見世へ顔を出したのは肴屋さかなやの徳蔵でございます。いえ、肴屋ではございせん。以前は肴屋でございましたが、今は人力車の車夫になつた、出入りの若いものでございます。この徳蔵には可笑をかしい話が幾つあつたかわかりません。その中でも未いまだに思ひ出すのは苗字めうじの話でございます。

徳蔵もやはり御一新以後、苗字をつけることになりましたが、どうせつける位ならばと大束おほたばをきめたのでございませう、徳川と申すのをつけることにしました。ところがお役所

へ届けに出ると、叱られたの叱られないのではございせん。何でも徳蔵の申しますには、今にも斬罪にされ兼ねない権幕だつたさうでございます。その徳蔵が気楽さうに、牡丹ぼたんに唐獅子からじしの画を描いた当時の人力車を引張りながら、ぶらりと見世先へやつて来ました。それが又何しに來たのかと思ふと、今日は客の無いのを幸ひ、お嬢さんを人力車にお乗せ申して、会津つ原から煉瓦通りへでもお伴をさせて頂きたい、——かう申すのでございます。

「どうする？ お鶴。」

父はわざと真面目さうに、人力車を見に見世へ出てゐたわたしの顔を眺めました。今日では人力車に乗ることなどはさ程子供も喜びますまい。しかし当時のわたしたちには丁度

自働車に乗せて貰ふ位、嬉しいことだったのでございます。が、母の病氣と申し、殊にあ云ふ大騒ぎのあつた直^{すぐ}あとのことでございますから、一概に行きたいとも申されません。わたしはまだ悄^{しよげき}気切つたなり、「行きたい」と小声に答へました。

「ぢやあお母さんに聞いて来い。折角徳蔵もさう云ふものだし。」

母はわたしの考へ通り、眼も明かずにほほ笑みながら、「上等だね」と申しました。意地の悪い兄は好^{いい}い塩^{あんばい}梅に、丸佐へ出かけた留守でございます。わたしは泣いたのも忘れたやうに、早速人力車に飛び乗りました。赤^{あか}毛^{ゲット}布を膝掛けにした、輪のがらと鳴る人力車に。

その時見て歩いた景色などは申し上げる必要もございますまい。唯今でも話に出るのは徳蔵の不平でございます。徳蔵はわたしを乗せた儘、煉瓦の大通りにさしかかるが早いか、西洋の婦人に乗せた馬車とともに衝突しかかりました。それはやつと助かりましたが、忌々^{いまいまい}しさうに舌打ちをすると、こんなことを申すのでございます。

「どうもいけねえ。お嬢さんはあんまり輕過^{はたち}ぎるから、肝^{かんじん}腎の足が踏ん止らねえ。……お嬢さん。乗せる車屋が可哀さうだから、二十前にやあ車へお乗んなさんなよ。」

人力車は煉瓦の大通りから、家の方へ横町を曲りました。すると忽ち^{たちま}出遇つたのは兄の

英吉でございます。兄は煤竹すすだけの柄のついた置きランプを一台さげた儘、急ぎ足に其処そこを歩いて居りました。それがわたしの姿を見ると「待て」と申す相図でございますう、ランプをさし挙げるのでございます。が、もうその前に徳藏はぐるりと梶棒をまはしながら、兄の方へ車を寄せて居りました。

「御苦労だね。徳さん。何処どこへ行つたんだい？」

「へえ、何、今日はお嬢さんの江戸見物です。」

兄は苦笑を洩らしながら、人力車の側へ歩み寄りました。

「お鶴。お前、先へこのランプを持って行つてくれ。わたしは油屋へ寄つて行くから。」

わたしはさつきの喧嘩の手前、わざと何とも返事をせずに、唯ランプだけ受け取りました。兄はそれなり歩きかけましたが、急に又こちらへ向き変へると、人力車の泥除どろよけに手をかけながら、「お鶴」と申すのでございます。

「お鶴、お前、又お父さんにお雛様のことなんぞ云ふんぢやあないぞ。」

わたしはそれでも黙つて居りました。あんなにわたしをいぢめた癖に、又かと思つたのでございます。しかし兄は頓着せずに、小声の言葉続けました。

「お父さんが見ちやあいけないと云ふのは手付けをとつたばかりぢやあないぞ。見りやあ

みんなに未練が出る、——其処も考へてゐるんだぞ。好いか？ わかつたか？ わかつたら、もうさつきのやうに見たいの何のと云ふんぢやあないぞ。」

わたしは兄の声の中に何時にない情あひを感じました。が、兄の英吉位、妙な人間はございませぬ。優しい声を出したかと思ふと、今度は又ふだんの通り、突然わたしを嚇すやうにかう申すのでございます。

「そりやあ云ひたけりやあ云つても好い。その代り痛い目に遇はされると思へ。」

兄は憎にくてい体に云ひ放つたなり、徳蔵にも挨拶も何もせず、さつさと何処かへ行つてしまひました。

その晩のことでございます。わたしたち四人は土蔵の中に、夕飯の膳を囲みました。尤も母は枕の上に顔を挙げただけでございますから、囲んだものの数にははひりませぬ。しかしその晩の夕飯は何時もより花やかな気がしました。それは申す迄もございませぬ。あの薄暗い無尽燈の代りに、今夜は新しいランプの光が輝いてゐるからでございませぬ。兄やわたしは食事のあひ間も、時々ランプを眺めました。石油を透すかした硝子の壺、動かない焰を守つた火屋ほや、——さう云ふものの美しさに満ちた珍しいランプを眺めました。

「明るいな。昼のやうだな。」

父も母をかへり見ながら、満足さうに申しました。

「眩^{まぶ}し過ぎる位ですね。」

かう申した母の顔には、殆ど不安に近い色が浮んでゐたものでございます。

「そりやあ無尽燈に慣れてゐたから……だが一度ランプをつけちやあ、もう無尽燈はつけられない。」

「何でも始^{はじめ}は眩し過ぎるんですよ。ランプでも、西洋の学問でも、……」

兄は誰よりもはしやいで居りました。

「それでも慣れりやあ同じことですよ。今にきつとこのランプも暗いと云ふ時が来るんです。」

「大きにそんなものかも知れない。……お鶴。お前、お母さんのおも湯はどうしたんだ？」

「お母さんは今夜は沢山なんですつて。」

わたしは母の云つた通り、何の気もなしに返事をしました。

「困つたな。ちつとも食^{しよく}気がないのかい？」

母は父に尋ねられると、仕方がなささうに溜息をしました。

「ええ、何だかこの石油の匂が、……旧^{きう}弊^{へい}人^{じん}の証拠ですね。」

それぎりわたしたちは言葉少なに、箸ばかり動かし続けました。しかし母は思ひ出したやうに、時々ランプの明るいことを褒めてゐたやうでございます。あの腫^はれ上つた唇の上にも微笑らしいものさへ浮べながら。

その晩も皆休んだのは十一時過ぎでございます。しかしわたしは眼をつぶつても、容易に寝つくことが出来ません。兄はわたしに雛のことは二度と云ふなと申しました。わたしも雛を出して見るのは出来ない相談とあきらめて居ります。が、出して見たいことはさつきと少しも變りません。雛は明日になつたが最後、遠いところへ行つてしまふ、——さう思へばつぶつた眼の中にも、自然と涙がたまつて来ます。一そみんなの寝てゐる中に、そつと一人出して見ようか？——さうもわたしは考へて見ました。それともあの中の一つだけ、何処か外へ隠して置かうか？——さうも亦わたしは考へて見ました。しかしどちらも見つかつたら、——と思ふとさすがにひるんでしまひます。わたしは正直にその晩位、いろいろ恐しいことばかり考へた覚えはございません。今夜もう一度火事があれば好^いい。さうすれば人手に渡らぬ前に、すっかり雛も焼けてしまふ。さもなければ亜米利加人も頭の禿げた丸佐の主人もコレラになつてしまへば好い。さうすれば雛は何処へもやらずに、この儘^{まま}大事にすることが出来る。——そんな空想も浮んで参ります。が、まだ何と申しても、

其処は子供でございますから、一時間たつたたたない中に、何時かうとうと眠つてしまひました。

それからどの位たちましたか、ふと眠りがさめて見ますと、薄暗い行燈あんどうをともした土蔵に誰か人の起きてゐるらしい物音が聞えるのでございます。鼠かしら、泥坊かしら、又はもう夜明けになつたのかしら？——わたしはどちらかと迷ひながら、怯おづ怯おづ細眼を明いて見ました。するとわたしの枕もとには、寝間着の儘の父が一人、こちらへ横顔を向けながら、坐つてゐるのでございます。父が！……しかしわたしを驚かせたのは父ばかりではございません。父の前にはわたしの雛が、——お節句以来見なかつた雛が並べ立ててあるのでございます。

夢かと思ふと申すのはああ云ふ時でございませう。わたしは殆ど息もつかずに、この不思議を見守りました。覚束おぼつかない行燈の光の中に、象牙しやくくの笏しやくをかまへた男雛をびなを、冠やうらの瓔やうら珞くを垂れた女雛めびなを、右近たぢばなの橘たちばなを、左近さきゑの桜えを、柄えの長い日傘かつを担しいだ仕丁しちやうを、眼八分たかつきに高坏たかつきを捧げた官女ぼんぼりを、小さい蒔絵まきゑの鏡台や箆へら筒つつを、貝殻尽かいがらしの雛屏風あなを、膳ぜん碗わんを、画え雪洞ゆきぼりを、色系てまりの手鞠てまりを、さうして又父の横顔を、……

夢かと思ふと申すのは、……ああ、それはもう前に申し上げました。が、ほんたうにあ

の晩の雛は夢だったのでございませうか？ 一図に雛を見たがった余り、知らず識らず造り出した幻ではなかつたのでございませうか？ わたしは未^{まだ}にどうかすると、わたし自身にもほんたうかどうか、返答に困るのでございます。

しかしわたしはあの夜更けに、独り雛を眺めてゐる、年とつた父を見かけました。これだけは確かでございます。さうすればたとひ夢にしても、別段悔やしいとは思ひません。兎に角わたしは眼^まのあたりに、わたしと少しも変らない父を見たのでございますから、女^め々しい、……その癖おごそかな父を見たのでございますから。

「雛」の話を書きかけたのは何年か前のことである。それを今書き上げたのは滝田氏の勧めによるのみではない。同時に又四五日前、横浜の或英吉利人^{イギリス}の客間に、古雛の首^{おもて}を玩具^{おもちゃ}箱に投げこまれながら、同じ憂きめを見てゐるのかも知れない。ゴムの人形と一つ玩具箱に投げこまれながら、同じ憂きめを見てゐるのかも知れない。

(大正十二年二月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系 ㊦ 芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utyama

校正：福地博文

1998年11月7日公開

2004年3月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雛
芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>